

紀行《イタリア文学》—— カラーブリア ——

クレーリア・ロマーノ・ペッリカーノ Clelia Romano Pellicano (1873-1923) 著

『カラーブリア物語集 NOVELLE CALABRESI』邦訳 (その2)

清 瀬 卓

〈Sommario〉

Il motivo principale del racconto di Clelia R. Pellicano, tradotto in giapponese per la prima volta nel presente saggio di traduzione, non consiste nelle esperienze amorose di una ragazza calabrese gravemente ammalata e del suo giovane dottore provinciale. A ben vedere, però, ci si accorge che esso risiede, nella rivalità professionale fra un ambizioso chirurgo promettente, e il suo collega, medico generico. Costui ascolta il racconto delle terapie che il giovane medico ha riservato alla ragazza per curarla, in un dialogo che si svolge in un policlinico romano. Si può notare, dunque, il fatto che, mentre una specie di storiella d'amore procede nei ricordi raccontati dal chirurgo, a mano a mano si rivela, nella storia della medicina della Belle Époque in Europa, la vittoria della chirurgia sulla fisiologia. La prima si basa completamente sull'anatomia del corpo umano "senza vita", mentre la seconda studia l'organismo del corpo umano "vivo", attraverso complicati esperimenti chimici con farmaci *in vitro*.

エフェメラル・フィーヴァー
《一過性発熱》 (“UNA EFFIMERA”) [承前]

スフィンクス
“獅身女面獸” に捧ぐ A “Sfinge”

「詩人になったね！」

「休止状態は短いものだった。人間とは思えないような叫び声をあげると、激痛のため彼女は眠りから急に覚醒した。薄っすらと眼を閉じていた彼女は白眼をむいた。その眼は、助けを求めてほくの眼の前でグッと見開かれた。その瞬間のことを、ほくは未だに忘れられない。ポッとした燈火の光に照らされて、古典的な輪郭の彼女の顔は、枕元から完全にずれて、影に隠れてしまった。黒くとぐろを巻く蛇のように雑然と纏れ合って縮れた髪の毛が創り出す額縁に納まった彼女は、まっ白な枕元で空ろな眼差しをこちらに向けていた。その虹彩が激痛に引き攀って、光を失ってしまった有様を一目見ると、このほくは、何か古代のメダルに彫り込まれたうら若いメドゥーサの奇怪な容貌を思い出したのだった…ほくは、憐れで身体が震えた。自分と彼女のことを憐れに思っていたのだ。彼女を助けようと、あらん限りの知力と気力をふり絞った。彼女の様子を、穴のあくほどジツとうかがっていた。自分の周囲を必死になってさぐってみた。その瞬間に、いったい誰が示唆を与えてくれたのか？ 苦しそうに首に伸ばされた彼女の肘に、ほくの眼

がいった。その片手は、首のところで縮れ毛の纏れた髪の毛のなかに隠れてしまっていた。ぼくは冷たい指で、機械的にそこに触れてみた。そうしてカッと熱を帯びている彼女の指先まで、屈曲した前腕のラインを眼で追った。彼女の指は、なんとか苦痛を和らげようと、右の耳の後ろをグツと押さえていた。ぼくは、その指を持ち上げてみた。すると、ひとつの腫脹が触知できた。咄嗟に、ぼくの心臓に血液がドツと押し寄せて、希望に胸が膨らんだ。」

「中耳だ！ 中耳炎だったのだ！」

「そうなんだ。乳様突起炎¹⁸⁾で、その炎症の経過は、ご存知のように、髄膜炎の性格を呈する…」

「そして、迂闊だったが、髄膜炎そのものを惹き起こすのだ。」

「そこで、このぼくは、愚かにも、そのことを疑いもしなかった。原因を除去すらししないで、症状が消えてくれるように切望していたのだ。ぼくは、分利¹⁹⁾や不測の援軍や奇蹟が起こることを期待していたのだ。」

「それで？ …」

「てっきり骨髄炎（骨膜とその下部にある骨の炎症）の可能性があると思い込んで、小さな燈火の覚束ない光を頼りに、耳介後部の溝と平行に骨膜まで深くワイルド式縦切開術²⁰⁾を施した。手術刀が貫通すると、アナーイデは無気力からほんの少し立ち直り、フツと溜息を漏らした。ところが、その苦痛の緩和は、一瞬の出来事だった。意識を取り戻すと、喉が渴いたと云い、か細い声で礼をぼくに云った。すると、とうとう彼女はふたたび眠りに陥った。それは、ほとんど健康な睡眠だった。ジュリオ、それは何という夜だったことか！ どう表現すればよいのか分からないが、思案と予感の入り混じった不安な出来事のために、永遠にも思われると同時に、あつという間の一晩だった。ぼくは、病気の本当の原因究明が救しがたいまでに遅滞したことを恥じ入る気持ちだった。診断は、単なる偶然のお蔭だったのか？ このぼくにしてみれば、その娘に健康回復の兆候が見え始めたと考えることで、誇らしい気持ちと幸福感に満たされていて、静穏に経過してゆく時間を熱狂的に切望していた。ぼくがその存在を常に否定してきた神の御意志に対して、あらためて希望を託し感謝したい衝動に駆られていたことにもよるが…」

「それが恋、恋心というものだ。」

「一晩中、ぼくは一睡もしなかった。熱が出たように考えて…」

「君にそれが恋だと念を押すなら？」

「確かに——ぼく自身はしっかりと意識しているが——自分にとって、一番真剣に生きた時間だったことは間違いない。ぼくの風変わりな情熱は、その晩とうとう頂点に達して、自分の気持ち次第で、たちどころに成就できる段階にあった。それこそは、精神が高揚して浄化され、魂はあたかも火あぶりの刑に処せられる詩人たちが賞讃した聖なる炎に違いなかった…」

「君にも、やっと分かってもらえるのか?!」

「同感するし…そうでもない。まあ、聞いてくれ。午前3時頃、下がっていた体温が、突然ふたたび上昇し、うわ言をくり返すようになり、前夜の心配な症状がぶり返した。ぼくとしては診

断を訂正して、骨骨膜炎の望みをもっと確実なものにする必要があった。」

「化膿性蜂巣織ほうそうしき（疎性結合組織）²¹⁾ 炎とでも？…」

「御名答。すぐにも手術しなければならなかった。ところが、乳様突起削開術²²⁾は、熟練した人の手助けがなければ、すみやかに処理できる問題ではなかった。と同時に、孤独な戦いを演じて苦しんできた部屋に他人を入れ、救命策を分かち合う気がまったくしなかった。」

「気持ちは分かる。」

「払眺ふつきょう、ぼくは銀梅花ぎんばいかと迷迭香ローズマリーの植え込みで半々に区切られ、鶏小屋に隣接した菜園と果樹園の広々した土地の眺望が見下ろせる硝子窓ガラスのところに立っていた。ぼくは曙光しょうこうを注意してうかがっていた。青みを帯びた空に肉のような赤みがさし、ようやく目覚めたばかりの芳香ただよが漂い朝露ぬに濡れた小さな植物界フローラは灰色を呈していた。この自然の演出に、もし感動するだけの時間的余裕が与えられていたなら、ぼくは生涯で初めて深い感動を味わったことになっただろう。ところが、その余裕はなかった。熟考を重ねた末に、ぼくは独力でやってみることを決意していた。術創の奥から膿汁のうじゅうが滴っているのを観察したことを思い出して、ぼくには膿うみをすばやく処置することができると思われる細い骨の通路ソンデに消息子を差し込んでみたくなった…こうして、ぼくは自分が間違っていなかったことを実証しようとした。とにかく成功を手にするために、グズグズしてはいられなかった。家政婦を起こして、必要な物品を用意すると、最初に切開した箇所はくりに、水平方向に後頭部に向かって、二度目の切開を加えた。三角形の皮膚の両隅を切開してから、骨膜を剥離切除した。やがて、消息子の導く経路を辿ってゆき…」

「それにしても、どうしてこれほど微に入り細を穿とうとするのだ？」

話のこの箇所を特に重要視したクラヴェリは、そっけない返事をした。

「だって、ぼくの話し方だからさ。もしお気に召せば、それでよい。嫌なら、もう止めておきましょう。」

「やれ、やれ。粘着気質のクラヴェリ君、むっとしたね。ただぼくは君に、そのルートで…してみることを観察させたいと思っただけだ。」

「君がぼくに話させてくれるなら。」

「…米国夫人が、今ごろ首を長くしてお待ちかねじゃないのかい。」

「心配はご無用だ。こうした場合、この20年間、頭脳の計時機能が数学的正確さで時間を計測してくれるので、ぼくは安心している。約束の時間に5分たりとも遅れたり、先に着いたりしたことがないぐらいだ。」

「ご立派なことだ！ さあ、続けたまえ。結局どうなったのか、ぼくは知りたくて仕様がな

い。」

「そう、ことは実に簡単だった。手術が効を奏した。アナイデは、まったく嫌がらなかった。むしろ、ぼくが注意して彼女を左向けに寝かせ、患部を消毒するために髪の毛を持ち上げ、ぼくが手にしている手術刀メスがキラリと光るのを見ても、未知の苦しい処置を受けなければならないと覚悟して、質問すらぼくにしなかった。ただ、彼女はじっと名状しがたいほど信頼しきった眼差

しをあらためてほくに向け、まるで教会へ出かけて村の守護聖人を拜むかのように感謝の気持ちを表していた。君に是非とも知ってもらいたいことがある。あの地方の女は、どんなに猛々しい女でも、愛情については、まったく回教徒的に考えていることだ。大奥の女中より、ずっと情熱的だが、官能的ではない。数百年来、主人の男性に依存して、滅私奉公——時に卑屈とか侮辱——にまで至る隷属の遺伝的な本能から、完全に西洋的な活動を東洋的な宮仕えにすりかえているからだ。生彩に富む機敏な知性と精力的な手と苦役に馴れ鍛えられた身体と…」

「何と素敵なおの恋の道具！」——ブリッツィは呟いた。

「実に素敵だ！ 実際のところ、黙って美的観照に耽るその眼差しからして、ほくの記憶するアナーイデの姿はその通りだった。それは、ほくの知っている自由奔放な野生児ではなく、自分の主人の脚下にひれ伏す東洋の奴婢の姿だった…」

「幸運な小悪党め！ だから、彼女が元気になった途端に、愛人にしたのだろうか？」

「よしてくれ。ほくをいったい何者だと思っているのか？ むしろほくは刻一刻と彼女の眼差しの中に、ほくの気がかりだった治療が無効でなく、彼女が感謝の意を表してくれる兆候だけを見ていた。そればかりではなかった。君は、ほくが手術の準備をしていたことを覚えているかい。ほくの頭の働きのすべては、眼と腕に集中しようとしていた。分かるだろ、その時点で世界の重みがほくを押し潰してしまう可能性があった。それを意識しないわけにはいかない…おまけに、ほくには実践経験がなかった。ここ数日、生命の脈が、ほくには微弱にしか感じ取れなくなっていたことが不安だった。ほくは膿腫が出来ている乳様突起蜂巣を先ず切開して、術創を乾燥させてから、蜂巣織を潰し、内部に空洞をひとつだけ形成したが、その手術手技は一種の官能を伴っていた…そうだ、白状するが、君が愛人たちを大切にするように、ほくは技量にすごく執着していた。おそらく、この情熱なのだ。情熱は情熱だから。君なら云うだろう、他の情熱すべてに免疫をつくるために。女性への情熱も含めて？ 多くの人々は、ほくのことを野心家だと決め付ける。おそらくそうなのだろう。技量によってのみ、ほくは名声を博して、出世したい。他の手段を用いないで。技量に青春の快活な全エネルギーと中年の意識的な力を傾注したい。《大腦ニ雌雄ヲ意識サセル》といった仏蘭西の科学者の不自然な憧れに——彼はニコツとして付け加えたが——到達しなくとも。もし、王国を征服するために出陣する機会を与えられても、ほくは遠慮させてもらおうが…科学界の王者として支配し、古代の武将が勇ましい太刀を振りかざしたように、未来を切り拓く太刀である手術刀を操作して、この人体という複雑な機構を修復するだけでなく、次第に衰えてゆく組織体を強化して、造物主からその職能を奪い時間の災禍に抵抗しようとするのであれば。巨人族の何たる夢想か！」——そして、クラヴェリは変に勢い付いていた。彼の青い眼は、磁石さながら磁力にキラキラと輝き、火照った頬骨が際立って見えた。台座の上に突っ立っているかのように、野心的な夢のなかに背筋を伸ばしてスックと立っている彼の姿は、ずっとスマートに見えた。

ジュリオは、そのような彼の姿を一度も見たことがなかった。この20年間で初めて彼は、陽気な利己主義者——少なくとも彼のことを、いつもそのように考えていたが——に、一種の畏

敬の念を覚えたのだった。

「ぼくは内科学の方を専攻したい。」——彼は自分の意見を述べた——「血を見ることが少ないからね。」

「内科学か！」——クラヴェリは、冷ややかな笑いを浮かべていた。優秀な外科医としての彼からすれば、姉妹科学^{サイエンス}は控えめに見ても軽蔑^{けいべつ}の対象でしかなかった——「それにしても、内科学などは、空理空論のひとつの帰結だ！ 君たちこそは、おそらく発熱^{はつねつ}には悪魔祓^{ばら}いの儀式で、リューマチ²³⁾の痛みには呪文^{じゆじゆつし}を唱えて治療した呪術師^{じゆじゆつし}の末裔ではないのか。君たちは、呪術師^{じゆじゆつし}が迷信に訴えかけるように、暗示を利用しているのではないのかね。」

「〈君たちこそ〉と云ったね。少なくとも、〈ぼくたちこそ〉と云ってもらいたい。」

「ふーん。ぼくはだいぶ前から内科学に見切りをつけて、外科学に鞍替えしている。医師として、ぼくは出来るだけ裕福な患者しか診^みないようにしている。彼らは馬鹿にされていても奮^{ふん}発^{はつ}してくれるから…病人とその親戚縁者たちが信頼しきって見守るなかで、自分が処方箋^{カールテ}を走り書きする様子を想像する度に、原始的な呪術師^{じゆじゆつし}のイメージを思い浮かべないではおれない。その彼が白墨片手^{チョーク}に地面に円を描くと、その周りを親戚たちが唱和しながら踊ることになる。」

「それは、またオーバーな云い方だね。」

「君が思っているほどではないけれど。さあ、話せよ。おそらく医学は自然界に秘められている健康の秘訣^{ひけつ}のすべてを、数百年来の研究によって、植物界や鉱物界や海や火から奪^{うば}ってくることができたのでは？」

「全部ではない。その大部分なのは確かだ。ぼく同様に、君だっのご存知のはずでは。」

「そりゃ、買いかぶりだ。キニーネ²⁴⁾とか昇華製剤^{しょうか}など、新薬でないごく僅^{わず}かな特効薬を除けば、内科学は合成剤と散薬^{さんやく}だけしか持ち合わせがない。それも、効能が発揮されるためには、患者の積極的なあらゆる意志力を必要としている。」

「しぶとい感染症を根絶してゆく血清とか？ 外科学が恩恵^{こうむ}を蒙^{かぶ}っている麻酔剤とか？ こうしたものは、内科学の勝利ではないのかね？」

ところが、クラヴェリは負けてはいなかった。

「ぼくからすれば、内科学は幼少期の心もとなさと無意識が特徴的な未発達^{サイエンス}の学問だ。」

「それはお門違い^{かど}というものだ。内科学だって、発展・進歩を遂げている。細菌学から磁気療法^{さいみん}や催眠療法に至るまで、ありとあらゆる新発見^{しんはっけん}と内科学が手を結んでいる現状は知っているだろう？ …心霊療法^{せいりやう}だって、何らかの驚くべき貢献をして、病気との戦いに予想外の武器を提供してくれるとも限らない、そう思わないか？」

クラヴェリは、腹立たしく言下に云い放った——「個人的には、内科学は、社会生活上厳守されるべき掟としての公衆衛生が普及すると、もはや無用^{ちようぶつ}の長物となってしまう、やがては消滅してゆく運命にあると思う。」

「ぼくが逆説^{パロドックス}を弄^{ろう}していると非難しているようだが、そう云う君は？ …」

「ぼくの方は、ただ考えていることだけを話している。つまり、内科学は錬金術^{れんきんじゆつ}と神秘学^{オカルト}との

合体獸的で曖昧な学問で、一見すると口当たりがよく、湯治に行く必要のあるヒステリーの小娘のために創られたものだ…その理由は、健康が一番大切なもので、また健康を真面目に考える…君のような詩人肌で良識を具えた青臭い粋な先生向けだから…」

「医学をとるのか、女性をとるのか？」

「両方さ…一方で、外科学も。これこそ、手ごたえのあるゆるぎない現実だ。厳密な学問のように正確で、神の御業のように素晴らしい。」

「カラープリアに話を戻そう。」——ブリッツィは穏やかに提起した——「そして、それぞれ自分の立場を譲らないことにしよう。」

「カラープリアに話を戻そう。」——クラヴェリは背いた——「で、正確に謂うと、話は自宅からだ——すっかり疲労困憊したぼくは、半時間後に、ズキズキする頭を抱えて帰宅していた。」

「そこでだ。冬も夏もシャワーを浴びて血行を刺激しているぼくは、どんなに夢中になって、冷水で手足を活気付けてくれる亜鉛²⁵⁾の浴槽に飛び込んだことか。忠実なルカの両手で敷かれた清潔なシーツにくるまって、どれほど大きな官能に転々と悶えたことだろう。ルカというのは、背に瘤のある若者のことで、彼は重要な務めからつまらない仕事まで、あれこれ何でも引き受けてやってくれる。外科治療の助手や召使から、料理人や下女役まで、一人で兼ねている…」

「すぐにぼくは眠りにおちて、そのまま翌朝まで眼が覚めなかった。目覚めたとき、寝台のなかに入っている自分に気付いても、そんなに吃驚しなかった。あたりを見まわすと、馴染の道具類はいつもの状態にきちんと整理されていて、ぼくに一種の安堵感を齎してくれた。この静謐は、勤勉で前向きな独身者の生活に欠けたことがなかった。ところが、その快さを、今までその瞬間ほど満喫したことはなかった。ぼくにとって、その時ぐらい、この世の他のものと交換するには、あまりに貴重な宝物に思われたことは一度もなかった…ぼくたちが不在であっても、事物はそれらを配置し、それに囲まれて暮らしている人間の痕跡や性格をとどめている事実を、ジュリオ、君はどう説明する？ 眼に見えない鏡のように、その精神を反映させている事実を。」

「ぼくなら、こう説明するよ。」——ブリッツィは、考え込みながら答えて云った——「事物は多孔質の木や硝子や青銅の材質のお蔭で、我々の身体から放出される磁気を帯びた流体をたっぷり吸い込んで、小壘に香水が入っているように、その流体を貯蔵し、ちょうど草木や花の呼吸と同様に、人間の感覚では把握できない神秘的な気体となって、あらためて我々に送られてくるのだ。それで我々を包み込んでしまうので、我々はそのなかに自分たちをあらためて見出す結果になるのだ。」

「ということは、人間存在の直接的放射としての反射生命を生きているとでも云うのかい？」

「そう仮定してもよい。人間の頭脳と手で造り出され、我々の本能に必要とされ、我々の感覚に好都合であるからには、事物は我々の精神生活とも、我々の意識の声とも調和して、我々の思索の沈黙した木霊になる運命にある…他でもない、それゆえに、事物は我々の喜怒哀楽を取り込んで、それを如実に反映し、積極的に介入して、悲しみとか安息とかの気分を我々に呼び起こす

ように思われるのだ。その時々で、苦しそうにも、爽快にも、慰めてくれるようにも見えるのだ。』

「そうでなければならぬ。」—— クラヴェリは今回は彼のことを詩人だとか気遣いだとか決め付けしないで、結論付けて云った—— 「というのは、長い熟睡にまして、（まさに、川岸に打ち上げられた^{ひんし}瀕死の魚が、不注意な手や慈悲深い手で、そっと押し戻された浪^{なみ}のなかで、あらためて経験するはずの）そのなかに生来の元素として再度自分を見出したその家庭の冷たい雰囲気のお蔭で、ほくはあらためて心の^{バランス}均衡を取り戻すことができたのだから。机の上を見ると、サイコウラがほくを呼びにやって来た時点で、ほくが開けたままにしておいたケーニツヒ²⁶⁾の『病理学』があって、その上に、書齋の小さな^{ランプ}燈火の^{シェード}緑色の^{シヤード}笠がかぶさるような格好になっていた。その^{しきい}仔細を見ると、最近の数日の出来事が思い出され、ほくは《屋敷》へ治療のために上がって行かなければならぬことを思い出した。』

「そんなにあっさり忘れてしまっていたのか？」

「こんなにすっかり。アナイデは？」—— ほくは半信半疑で、ぼんやり自問自答した—— 「本当に、彼女は死にかけていたのだろうか？ 本当に、ほくは彼女の生命を案じていたのだろうか？ チェンツァ夫人や魔女や犯罪や^{ずいまく}髄膜炎や手術。それに、苦悶の徹夜や白亜の壁に映る黒い影やほくの最後の晩のはっきりした^{ぜいじく}発熱—— すべては夢ではなかったのか？ ほくは妄想から抜け出てきたのか、魔法にかかっていたのだろうか？ サイコウラに秘薬でも盛られたのではなかったのか？…冗談を抜きにしても、ほくは確かに^{のぼ}悩ましくひどく奇妙な悪夢から^さ醒めた人間のような印象を持った。ほくがトボトボと坂道を登っていく折り、気がかりなことがなかったわけではなかった。あの前夜のような予感がまた襲ってくるのではないか、それからというもの3日間、ほくを別人に変えてしまった奇妙な狂乱状態にとりつかれるのではないかと心配していた。』

「恋には、こうした^{かいり}乖離現象が見られるものだ。』

「今、ほくはその恋の^お狂乱状態を惜しんでいるほどだ。』

「それは間違いだ。』

「で、その時、自分の脈が正常なのを確認して、ホッとした。それに脚もはやる気持ちを抑えることができなかった。大きな部屋の様子、なかでもほくの鼻で間違いなく嗅ぎわけられる田舎の^{パントリー}食料品貯蔵庫の^{にお}臭いが、（疑念の入る余地はあったが）夢でなかったことをちゃんと保証してくれていた。』

「^{クッション}枕に上体を^{もた}凭せかけて、垂れ頭巾の格好に顔と^{あご}顎をくるんでいるシーツのように、色白のアナイデは、ほくの姿を認めると、^{あお}蒼ざめた^{おもて}面を輝かした…」

「で、君は？」

「ほくは…実に落ち着き払っていた。すべてが上首尾なのを確認して、満足していた。熱が下がったことは、^{かいふく}恢復期が保証されたようなものだ。やがて、ほくは敬意を込めて^{ベッド}寝台から距離をとって腰を下ろすと、病気になった最初の原因について、冷静に問いただしてみた。彼女は幼い

頃、右耳の膿漏症に罹ったが、2歳の初めに治ったと、ぼくに語った。そして、《事故》の晩のことを（彼女は、ぼくがその原因を推察し秘密を暴き出そうとしているのではないかと恐れて、事件に触れる段になると、どれほどブルブルと身震いしたことか）ぼくに告白した。」

「《事故》の晩のことを？…」

「涙で眼を赤く泣きはらした彼女は、頭に何もかぶらず、近くの森——サベエの書物を膝の上に置いて読んでいたぼくを吃驚させたその森——から吹いてくる爽やかな風に逆らって、ひた走った。初めのうちは爽快感を味わっていたが、夜の湿り気を帯びたそよ風が素肌に忍び込んでくるのを感じると、やがてひどく気分が悪くなった…」

「可哀相に。」——ブリッツィは呟いた——「彼女は興奮した頭を鎮めようとするよりも、自分を苦しめ苛む悲劇的な光景から逃れようとしていたんだ…君が若い精神と魂に未知の地平を初めて切り開いてやったその同じ場所で…友である大自然の懐に抱かれて、こんなにも長い間押し殺してきた苦しい胸の裡と怒りの感情を吐露したかったのだ…」

「ほら、詩人のご登場だ！」——何となく友人から伝わってくる秘めたる感動に反発を覚えて、クラヴェリはからかった——「君の抒情的感性には手の施しようがない！」

「で、君の懐疑心も！ 例えば、あのまたとない告白に接して、君はどうしたのか？ はっきり云うと、君は…」

「このぼくかい？…ぼくはすべてをありていに話した。洗いざらい。リューマチの原因が、中耳に伏在していた病気の症状を悪化させたので、乳腺突起細胞に炎症が広がって…譫妄や髄膜炎その他の諸症状が現れてきたと。」

「ことはすべて何と簡単至極だったことか！」——皮肉たっぷり、ブリッツィは叫んだ——「ぼくだったら…くだらないと云うところだ！ 君はモンテパン風の小説をぼくたちの手本にしようとしたわけだ。その主人公のことをあわや信じさせるところだったが。」

「このぼくが、小説の主人公だって？ すまないが、そう望んでいるのは、君の方では…」

「そうかな？ 他に気付いたことは？」

「ああ、そう言えば、ぼくが手馴れた口調で問いただす度に、アナイーデは驚きの眼を見張って、ますます苦しそうな様子で、ぼくをジッと見つめていた…治療中の医師が、取り乱し不安げな様子で宵闇から姿を現した看護士であることが判らなくて驚いた彼女も、その時点では、それが夢だったのか現実だったのかとおそらく自問自答していたのだろう…」

「現実と夢とはこうも違うのかと、彼女は後悔していたのだ！ 彼女も、君のことをもう少し違う人間と思い込んでいたのだ。恋人の魂の全神経を集中して、《あの別の者》に執着していたのだ！」

クラヴェリは反論しなかった。むしろ彼が付け加えて語った口調には、一抹の秘められた悲しみすら感じられた。

「ぼくが立ち上がって、その場を離れようとする、彼女は眼にいっぱい涙を溜めていた。」

「で…例の《事》には一言も触れなかったのかい？」——ブリッツィはなおも食い下がっ

た——「^{せんもう}譫妄状態については、彼女は何も覚えていなかったのかい？ 君が聞きつけて、了解したと彼女は察しが付かなかったのかい？」

「家政婦は、ぼくが居る場で無意識に口を吐いて出たことばの危険性を彼女にほのめかしていたにちがいない。だって、何度も治療のためにぼくが戻って来ると、彼女は唇を震わせてぼくに問いただそうとするのだが、ことばにならなかったのだから…」

「君から助言を貰おうとしたのか、あるいは君の疑念を晴らそうとしたのか？」

「たぶん、その両方だろう。」

「彼女は、一度も敢えてその胸の^{わだかま}蟠りに触れなかったのかい？」

「触れたよ。ぼくたちは最後に会った時、少しは分かり合うことができた。その時、ぼくは羅馬に発つに先立って、彼女にお別れの挨拶をしようと出かけたのだった…」

「さあ、話してくれたまえ。」

「こういう次第だった。すでに一週間前から、ぼくは治療方法に疑問を感じていた。ぼくは1月前から普段の医師の仕事に戻っていたが、彼女はまだ寝台に寝たきりだったからだ。」

「完璧に自由な精神で？」

「完璧に自由な精神で。君には分かるだろう、後手後手に廻っていたわけだ。遅れを挽回する必要があった。昼間は、近隣の村から^{おうしん}往診を頼まれることがしばしばで、何度か重要な手術を行って報酬をたっぷり頂いたものだ。夜は、自分のために、明け方まで何杯も^{コーヒー}珈琲を飲んで就職試験の勉強をやった…それは、ぼくの人生で記念すべきM村での最後のひと月だった。ぼくの将来（すでに最終選考に残っていたぼくは、合格することが確実な試験を受ければよかったです）が決まっていたからではない。そうではなくて、その当時、若いぼくの全身全霊に力が^{みなぎ}漲って、行動力でも集中力でも、生まれてこのかた神から授かった最高の働きぶりを発揮したからだ。」

「その不可避な仕事^{げどくざい}が解毒剤として作用したので、例の別の病^{やま}いから君が癒える手助けをしてくれたわけだ…」

「…感傷的^{おセンチなやま}病いと云いたいのだろうか？ おそらくそうだろう。ぼくはあれこれ思い煩^{わずら}っていても、アナイデのことは、もはや気にしていなかった。むしろもっと緊急で深刻な症例^{ケース}に気を取られていて、ぼくは彼女のことを少し忘れかけていた。でも、普段の治療を忘れてしまうことはなかった。まるで秘められた恋^{わづら}患いのために、^{かいふく}恢復期が^{ちえん}遅延するかのよう、日ごとに少女がますますふさいで^{かいふく}恢復するどころか蒼ざめてゆく様子を、ぼくはほとんど気にも留めないで、大急ぎで処置をしていた。」

「可哀想^{かわいそう}に、君に恋をしていたのだ！」

「彼女は、ぼくに恋をしていた。話したように、さようならを彼女に云いたいと思ったその朝になって、ぼくははっきり分かったのだ。ちょうど復活祭の朝^{バスクワ}だった。あの山地に4月が訪れるのは遅いけれど、明るい穏やかな復活祭の日^{バスクワ}だった。平野部で微笑^{ほほえ}んでいる4月も、山地ではまだ真冬の寒さが^{せんぶう}わだかまっていて、3月の旋風が墓地にのさばっていた。前日、ルーカは、もみ

手をしながら、釣鐘は《開放されて》いるとぼくに告げて云った。徹夜のぼくの耳を聳するように苛む連打の音から、もう一度手に入れた自由が役立っていないことに不本意ながら気付いていた。不本意ながらと、ぼくは云ったが、別に嫌だったわけではない。その日、基督教世界はお祭り気分だったが、ぼくの心も浮き浮きしていた。翌日、ぼくは《助手職》の通行証をポケットに、首府の羅馬へと旅立っていった。ぼくは勝利を渴望している自分が、戦いで鍛えられ、心身ともに《強靱な男》であるように感じた。よくとおる青銅の鐘声は、自分の青春の声と共鳴しているように思えた。野原にカランカランと響き渡る鐘の音は、野山を越えて、熱気の籠った生活と文明開化の素晴らしい都会へと、ぼくの思索の飛翔に随伴してくれるようだった。鐘の音は、ぼくの心の拍子をそれらの拍子に合わせて、頭の中でも心の中でも歌っていた。お前に声をかけてくる人生に、お前に微笑みかける将来に、お前を待っている仕事に向かって、意気揚々と信念をもって突き進めと。万歳！ 今日、天と地に勝利が。おそらく君の額にも、後光がさすことだろう。」

「素晴らしい日だったに違いない。」—— ブリッツィは素直に認めた。

「こうして、行列を追っかけている群集の中をかき分けながら、ぼくは上機嫌でアナーイデのところへと坂を登っていった。云うまでもなく、爆竹花火の破裂音とともに、嘆きの聖母の外套から一斉に飛び立つ小鳩たちの飛翔に伴われて、聖母像を一方に、聖ヨハネ像をもう一方に、復活した基督の方へ進みながら墓地であらためて抱擁する復活祭の行列だがね…」

「我々のシチリアでも同じことだ…」

「M村の嘆きの聖母は、黒い外套ですっぱりと全身を覆っていたが、聖母マリアに不似合いなほど華麗だった。しかし、いったい誰がそのような些細な点に気付いただろう。女たちは神聖な出会いの歓びをすでに予感しながら、《美しい聖母、安心なさい、あなたの苦悩はもう終わりました》で始まる歌を唱和しながら進んでゆく人々につき従った。行列が基督が待つ教会へと、歓呼する別の群集の中を進んでゆく間、ぼくはアナーイデの家の前で立ち止まっていた。少女は、広場に臨む張り出した露台にずっと立ち尽くしていた。彼女が一心に眼で追っている光景は、我々が幼少時代に親しんだ祭礼の古くて常に新しい魔力を備えていたに違いない。田舎の教会のように柔和で明るい広間に入ると、榲桲や柘榴や干し無花果や平団扇仙人掌の実や腸詰や水牛 乾酪が、マホガニーや楓や紅玉や琥珀のさまざまな色調を作り出していたが、彼女の表情は、調和した陽気な合唱に調子外れの音を耳にしたようなショックを、ぼくに与えた。およそ一週間ほど、ぼくは来ていなかったが、彼女はぼくの不在中に染屋と女将が持って来たに違いない孤児の服を着て立っていた。そのような姿にお目にかかったことは、今まで一度もなかった。大人びた彼女の様子に、ぼくは驚いた。どことなく深刻な面ざしで、もの思いに耽った大きな眼をして、その様子がかえって数ヶ月前のアナーイデを彷彿とさせた…どう云ったものだろうか…ちょうど果実が花に似ているように、一人前の女性には少女の面影が残っているものだ。一人前の女性だ。まさにその通りだった。彼女に会うと、ぼくはふざけて《ナッデ》と呼び捨てにする気にならなかったほどだ。以前、読み方を彼女に教えていた頃、ぼくはそう呼んでいたものだ」

た。もはや丸顔でなくて瓜実顔^{うりざねがお}だったし、頬^ほっぺのポツとした赤みは失せてしまっていて、鬚^{かげ}りのある険しい眼つきをして、豊かな髪^けの毛は蓬髪^{ほうはつ}ではなく、耳のまわりや形の整った首筋^{しん}に輪状^{りんじょう}に巻いて束ね^{たば}ていた。」

「要するに、医師のお気に召さなかったのかい？」——ブリッツィは笑^{たず}って訊ねた。

「そりゃあ…確かに…彼女は、以前ほど活発で華やかではなかった…もっと…平たく云うと、《気になる存在になっていた》…ありていに云うと、ほくは初めて彼女に向かって、《こんにちわ、お嬢^{じょう}さん》と挨拶^{あいさつ}したのだ。それを聞いて、蒼白^{あお}い彼女は芍薬^{しゃくやく}みたいに顔をまっ赤に染めた。サイコウラは、復活祭^{バスクワ}の壘^{スミレ}を花束にしたり、一輪ずつにして壁龕^{へきがん}の聖母^{ヘキサ}マリアや基督^{キリスト}や聖ヨハネのコップ^{コップ}に分配していたのだが、アナーイデの赤い顔を見ると、急に不満そうに首を横に振った——《ここの行列は素敵だ》——ほくは親切に付け加えて云った。やがて、彼女の方を注視しながら、《ひどい顔色ですね！ ほくの処方を守っていないんでしょう。朝夕、牛乳を飲んでますか？》と訊^{たず}ねたものだ。」

「この黒いのは、毒ではないさ！」——サイコウラはきっぱりと云った。彼女は硝子^{ガラス}の鐘から聖像を3体とって、やがてあちらのお墓で開催される予定の出会いに備えるためであるかのように、それらを配置^{キリスト}していった。中央に基督^{キリスト}、右に聖母^{こひつじ}、左に仔羊^{こひつじ}を連れた聖ヨハネ。それから、彼女は、喪服^{もふく}は多かれ少なかれ哀悼^{あいとう}の気持ちと調和しているものだが、そのことに関して、なぜ黒色が必要な人物や、その色が災いになる人物が存在するのか、その理由を自信たっぷり^{自信}に説明してくれた。田舎の迷信がどのように説明されるものか、ほくは悲しい経験から分かっていた。土地の染屋^{そめや}たちは硫酸塩^{りゅうさん}²⁷⁾を配合する技術^{技術}を知らなかった^{技術}ので、病人に危険な疾患^{しっかん}を齎^{もたら}す原因^{原因}になっていた。

M村にほくがやって来る1年前の出来事だったが、喪に服していた一家全員が亡くなったことがあった。——いいかい、死んだのだ——原因は、肌着^{シャツ}の生地^{きじ}から肩掛け^{ショール}のメリヤス^{きじ}生地に至るまで布地に染み込んでいた毒素を吸引していたからだった。黒色染料の使用禁止命令^{命令}を実行させるために、ほくは土地の行政当局や染色業者や任意の犠牲者^{犠牲者}たちに（ほくに多少の敵意を招く結果になった）キャンペーンを張る必要があった。その犠牲者^{犠牲者}連は、有毒^{たんのう}な反物^{うば}を奪^{もたら}い取られてしまうのなら、死んだ方がましなどと云い張るような連中だ。

もはや、こうしたことのすべては、ほくには関係のないことだった。その企^{くわだ}てを、ほくの後継者^{後継者}の手腕^{エネルギー}に任せることにした…後継者が決まればの話だが。それはともかく、眉^{まゆ}を顰^{ひそ}めてアナーイデに近づくと、ほくは彼女の服の匂^かいを嗅^かいでみた。実際、硫酸塩^{りゅうさん}のきつい刺激臭^{刺激臭}が漂^{ただよ}ってきた。

「どこでこれを染めてもらったの？」——ほくは、むっとして大きな声を出した。

「ここよ。」

「ここだって?! 云うまでもないが、コセンツァの商人のものをあなたは買うべきだった。」——サイコウラは黙っていた。アナーイデは肩をすくめて、まったく意に介さなかった。

「ほくはカッとなった。」

「こんなものは今日中に燃やして処分しなさい。さもないと、ぼくが届け出ますから。」

「おお、彼はまた何を云っているのでしょうか。」—— 女はふたりともあきれ返って十字を切りながら、大声を出した——「父親の喪を中止することなど、一時間たりとも不可能だわ。」

「是非とも、そうしなくては」—— ぼくは命令するような眼つきでアナーイデにほめかしながら、食い下がった——「吸い込んでいるのは、毒瓦斯です。そんなに身体が弱っているあなたに、よくないに決まっています…」

少女は胸に顎をくっ付けたまま、返事をしなかった。ぼくは続けて云った——「明朝、町へ布地を買いに人を使いに遣れば、その日の晩にあなたはそれを手にすることが出来るでしょう。2日間あれば、衣装は出来上がってくるでしょう。もし喪に服していない姿を人に見られたくなければ、寝室にもう一度戻って、まだ何日か病人のふりをしなさい…」と。

「彼女には、そんなまねは出来ません、お医者さま」—— 魔法使いが、ちょっかいを出して云った——「善良な魂を侮辱するようなものです。彼女なら、それを災難と云うでしょう。」

「おしゃべりはそこそこに！」—— ぼくは、威嚇するようにジロツと睨んで命じた——「でないと、あなたとご主人の鬼婆を訴えますよ…」

かかる威嚇の効果は、ぼくの意図をはるかに超えたものだった。サイコウラは急に押し黙ってしまっ、亡霊のように、さっと姿を消した…アナーイデは、ぼくを直視して、眼を丸くした。

「安心しなさい」—— 彼女が神経質に身体をブルブル震わせているのに気付いて、ぼくは云った——「サイコウラを吃驚させようと、ぼくはこんな風に云ったまでです…」

「イーダは何も分かっていないの。」

「当りまえです。でも、安心しなさい。誰も訴え出るつもりはありません。その意図があったのなら、あなたの方こそ、訴え出ることができたはずです…ところが、あなたはむしろ黙って堪えることにしたのです。」

彼女がぼくの方を見た時の名状しがたい眼差しを忘れはしないだろう。そこには無数の感情と相反する思いがありありと浮かんでいた。《何ですって？》—— 彼女は内気に叫んでいた。《その通りだわ。あなたにもお分かり？》と云いたげだった。やがて、その眼差しと同じ名状しがたい口調で、ポソツとぼくに《妊娠中なの》と説明した。恥ずかしそうに眼を伏せたが、その眼つきに、ぼくは継母への憎しみと犠牲になった女への憐れみの感情とが闘ぎあっているのを認めた。それどころか、沈黙という火山灰の下に潜む火炎のように、胸に潜めた敵討ちの渴望と、その衝動をグッと押し殺そうとする意志と、彼女がずっと黙ったままなので、意気地なしの臆病者とはぼくが考えているのではないかという懼れと、秘密の鍵をぼくに授けて、名誉挽回をはかりたい切なる願いなどがうかがわれた。

「彼女は妊娠していた。継母は妊娠していた。」—— ブリッツィは思わず叫んでいた——「これで水解した。継母を憐れに思うはずもない少女は、母親のことを憐れんでいたのだ。母親の気持ちだが、彼女の眼からすれば、父親を殺した女すら神聖な存在と感じさせたのだ…」

「何と先走りするじゃないか。」—— クラヴェリは、ブリッツィの興奮を面白がって、諫め

て云った——「未来の…兄弟関係を思う気持ち、きっと彼女を引き止まらせたのだと思う。彼女が敵討かたきうちをすれば、血を分けた赤ん坊まで殺してしまうことになったのでは？」

「きっとそうだ…」——ブリッツィは認めた——「罪もない赤子は、肝つぶを潰した母親の胎内で死んでしまう可能性があっただろう。獄中で出産しても、苦しい懐胎期間かいたいの消すことの出来ない形跡を子供の生理に留めることになったであろう…やがて父親ててなし児となって、獄中の母親を持てば、犯罪の汚点けがに穢された名前を不名誉に思う彼にとって、未来はどのようなものになっていただろう？…」

「こうしたことのすべてを、きっとアナイデはかりは秤にかけて、憐れに思う気持ちに傾いたに違いない…」——クラヴェリうなずは頷いてみせた——「福音的なトルストイ哲学に依拠するには、まだそこまで成長してなかった彼女が、他の本能をすべて沈黙させる活力を見出したのは、女性らしさという本能の中だった。」

「おお、」——ブリッツィは力を込めて主張した——「オセロがデズデモナを憐れに思って愛したように、ほくだって彼女の沈黙を思って、彼女を愛しただろうよ。一方で、君は暗い表情の主人公ヒロインに、優しいことばのひとつもかけなかったとほくは断言するが…」

「勘違いしているぞ。心から熱い賞讃の思いを込めて、ほくは彼女に云ったものだ——《あなたは立派だった》と。」

「それでじゅうぶんだったのかい？」

「じゅうぶんだった。彼女は不意に態度を変えて、顔の表情が感謝と希望に燃えたように見えた。ほくが付け加えて《静かな生活をしてもらいたい。ほくの口から文句の付けようがないぐらい》と云おうとすると、彼女は咄嗟とつきに避けようとしても間に合わないほど素早い仕種しぐさで、ほくの右手を取って、口許もとへ持ってゆき、熱い接吻をグッと手に押し付けた…」

「その瞬間の君の姿を見せてもらうために、ほくは何と大きな代価を払ったことか！」

「実際、ほくは見苦しかったに違いない…有難い感情の吐露という衝動から慌あわてて避難しながら、その好機チャンスをとらえて、《ともかく、ほくの指示に従って欲しい。例の布地ぬのじはよしなさい…》と忠告した。彼女は《出来ないわ》と呻うめくように云った。」

「あなたが本当にほくが与えたほんの僅わずかな恩恵に感謝しているのであれば、とにかくほくの指示通りにやってみてほしい。今日だけでなく、ほくが居なくなっても、今後あわもずっと」と、ほくは急き立てるように云った。ほくは採用試験コンクールのことも、試験のことも、出発することも一切口にしなかったで、そのほのめかしは青天の霹靂へきれきとして作用した。彼女は《なぜそんなことをおっしゃるの？》と青ざめてボソッと云った——《あなたはずっとここに居いて下さるのではないの？ いったい誰が、あなたを追い出すことができるの？》

彼女は、ほくがその地に骨を埋める以外の望みも持たずに、（彼女がたくさんの読書を通じて空想力たくまを逞しくして、その境界線を越えていたに違いない）あの集落に暮らす運命にあると無邪気むじやきに信じきっていた。

「ここ留とどまるって！」——ほくはぎよっとなって大きな声で叫んだ——「…で死ぬ危険性がある

かも」

ぼくは残酷なことを云ってしまっ、彼女の死人のように蒼ざめた表情に気付くのが遅すぎた。まるであたふたと外科手術を敢行してしまった時のように、ぼくはむごい結論を口にしてしまった。

「明日、ぼくは羅馬へ発つ。お邪魔したのは、さようならを云うためだった。」

「出発なさるって？ どうして出発なさるの？」——胸に銃弾を一発くらったかのように、その知らせに意表を突かれて、彼女は口ごもった。

「就職試験のためだよ…」

一抹の希望の光が彼女の眼に戻ってきて、輝きだした。

「嘘でしょ！」——彼女はこう叫んだ。彼女が病気を患う前、ジュール・ヴェルヌ風の空想譚を語って、ぼくが奇想天外な宇宙世界の情報を彼女に提供して愉しんでいた頃、時々ぼくがよくやったように、自分の無知をからかおうとしているものと彼女は思い込んでいた。その頃の彼女は、吃驚したように眼を見張って、ぼくの話に耳を傾け、そのゲームに気付くと、抱腹絶倒するのだった。

「嘘でしょ！」——やがて、その否定のことは、あまりに厳然としすぎで、多少失礼に彼女には思われ、勝ち誇った邪心をちょっぴり見せて、こう云い直した——「何おっしやるの！ ここへ戻って来れるでしょ？ 当地でだって、試験は受けれるわ！²⁸⁾」

「しばしば男たちも！」——嘆息をついて、ぼくは云い返した。

ぼくの深刻な調子に、彼女は動揺した。彼女は苦悩から立ち直ると、大きく胸を弾ませながら訊ねた。彼女の眼は、ぼくの心中を探るようだった。

「で、その後？」

「その後のこと…分からないな…たぶん向うで働き口が見つかるだろう…」

「戻っては来ないのね？」

グッと喰いしばった歯の間から、意気消沈して喘ぐような彼女の声もれ出てきた。

眩きながら、ぼくは肩をすくめてみせる以外に仕方がなかった。

「誰にわかる？」

ところが、彼女は悟っていた。両手で顔を覆い隠して、すすり泣きをしだした。

「じゃあ、この私は?!」

ああ、あの「私は?!」ということばは、堰を切ったような勢いで、小さな心からほとばしり出たことだろう。それは打ちのめされて、引き攀った唇のなかでかき消えようとしていた。叫びとうめき声と嘆きが、混ざり合っていた。

クララヴェリは、その思い出に押し拉がれて立ち止まった。まるで苦悶に満ちた訴えの木霊が、頭の中で鳴り響いているかのように感じた。

ブリッツィは一息入れた瞬間を利用して、友人を景気よく攻めた。

「それで、君は平気だったのか?! 《もはやここにあなたが居なくなったら、私はどうすれば

よいのかしら？ 憎々しいチェンツァ夫人と二人だけで？ 私たち二人が、この恐ろしい秘密を抱えて?!」—— こう哀願する魂の叫び声に、君は動揺を感じなかったのか？ で、君は彼女の訴えかけるような眼差しに、《何故わたしを助けたりしたの。こんな風にわたしを見捨てるのなら、見殺しにしてくれていた方がよかったですのでは？》という叱責のことは読み取れなかったのだ。]

「話はそこまでかい？」—— ブリッツィの人情漸めいた長科白を聞いている間に、火が消えてしまった紙巻苘にもう一度火をつけると、クラヴェリは落ち着いた様子で訊ねた。

「ここまでだ。かといって、君が朴念仁であることに変わりはない。」

カルロは肩をすくめた。

「さっさと結論を出そう。彼女のために、いったいぼくがどうすることが出来たというのか？ 彼女と結婚することだろうか？ そのような愚かな振る舞いをしてかすほど、ぼくは彼女を愛してはいなかった。それどころか—— ぼくはすでに実感していたが—— まったく彼女を愛してなどいなかった…前の出来事？ 前の出来事は、空想と感覚の幻惑だった。彼女がぼくに熱を上げていることを…よく分かっていたが…？ そうなのだ。彼女がぼくに暗黙の裡に要求し、ぼくに与えようとしていたのは、まさにそのことだった。彼女自身を。それと共に、無限の献身とかけがえのない愛までも…ところが、このぼくには、それを貰う権利があっただろうか？ それに、ぼくの利己主義を白状すると、その愛はあまりに未熟で、身勝手なものになりそうで、ぼくは不安だった…事実、その時ばかりは、主人はこのぼくだったから。ぼくは恋人か奴隷か、あるいはその両方でもあって、好きなことができた…でも、まさにそうだから、彼女なら結果的にぼくを思いのままに操ることができたのでは？ 一方、このぼくは優柔不斷に憐れんだりせず、感謝の気持ちに囚われず、情にも流されなくて、ぼく本来の道をまっすぐに進んで行く必要があった。自分の経歴にとって有利であり、幸福に必要と判断された時点で、進退は自由自在に、妻帯することも思いのままに…」

ブリッツィは羨ましくなって、溜息をついた。事実、数年前にクラヴェリは、外科学部門で伊太利科学界が誇る3、4人の名士のひとりディ・ノヴェット教授の庶子だった娘と結婚した。知る人ぞ知るかかる好運が、彼に岳父の右腕という願ってもいない地位とともに、教授職と彼の才能を世に知らしめる絶好の機会を用意してくれた。ブリッツィは苦い思いで、こう考えたものだ。魅力的で賢い妻を持ち、知的で上品な二児の父親となったクラヴェリは、仕事と結婚生活の花道の彼方に、位人臣を極めた栄耀栄華が光輝を放っている様を見ているのだと。一方、ブリッツィは自分の性分から安きに流されて、取り返しのつかない過ちを犯し、彼の階層では、ほとんど落伍者同然だった。

「真実が、はっきりとぼくに飲み込めた。」—— 他方が話を続けて云った—— 「もしぼくが一歩譲っていたら、彼女はぼくの人生で身分相応の娘に出遭う日まで、何の足しにもならないお荷物になって、その日が到来すれば邪魔者になったことだろう。そこで、やがては互いに衝突する運命にある偏愛への誘惑は、あっさりと切り捨てる必要があった。だから、ぼくは彼女の《じゃあ、

この私は?》ということばに、断固とした態度で答えて云った——《あなたは、やがて結婚することになる。あなたは、若くて美しく裕福だ。あなたに求婚したい人は山ほど居る。これがチェンツァ夫人や見たくもない彼女の姿や彼女に接する危険や…悲しい思い出を回避する最良の方法なのだ。》—— ぼくはより優しく付け加えて云った。]

彼女は顔をあげて、祈りや涙の痕跡を認めない眼差しで、ジッとぼくを見つめて、きっぱりと宣言した——《一度たりとも》と。

神聖な親族たちが最終的に集うことになる教会墓地入り口の上から爆竹花火の破裂する音が、彼女のこぼに木霊した。放心したように、私たちは空を眺めた。それは祭礼が絶頂を迎えようとしている瞬間だった。抱擁された復活の基督が纏っている赤い胴着は、嘆きの聖母の黒い外套と見分けがつかなくなっていた。一方、忠実な仔羊を連れた聖ヨハネは、彼は彼で祝福を述べる自分の番が廻ってくるのを大人しく待っていた。

色とりどりの衣装を纏った人々でごった返す祭典の狭苦しい集会所で、その特徴的な場面は、村の人家の屋根越しに、壮大な光の祭典に包まれて展開された。あっという間もなく、黒い外套が聖母の肩からずり落ちた。途端に白い小鳩たちが、一斉に飛び去っていった。聖母は、頭の周囲を星がぐると取り巻き、顔色は薔薇色で金髪のニュールンベルク人形のように、金の刺繍のある青い衣装を着けた姿を現した。人々は快活に熱狂した。聖像の台座の周囲で、爆竹が炸裂して、派手な煙を噴き上げた。霰の降る音が、楽隊の響きと鐘の音と群集のざわめきに混じって、ぼくたちのいる露台まで聞こえてきた…小鳩の群れがキラキラと純白の雲のように飛翔しているコバルトブルーの大空に縁取られた実に鮮明なその情景をひと目見れば、彩色画家なら描いてみたくなっただろう。ところが、アナーイデはその光景とは裏腹に、心の苦悶にもうこれ以上耐えられなく感じたのであろうか、曲線を描く手すりに頭を垂れて顔を隠した…群れの中の一羽の小鳩が、身を避けようと露台の片隅にやって来て、チョコチョコと動きまわったが、その小さな薔薇色の眼は、傍に居る影になった群集を不信の眼差しでジッと見つめていた。ぼくは黙って、暇乞いをする適当な時期をうかがっていた。しかし、時間はどんどん経っていった。ぼくは少女の腕を軽く取ることに決めた。良心の呵責に堪えない様子で、こう云った。

「さようなら、お嬢さん。しっかりして。なんといっても、あなたはまだ16歳なのだ(自分が野暮だと分かっていた。でも、彼女に云うべき他にことばが見つからなかった)。16歳と云えば…そりゃあ…どのような心の痛手にも立ち直る力が備わっている。やがて、あなたはそのことに思い当たることだろう。ところで、例の着衣を焼き捨てることをお忘れなく。そして、休養を取るように。安心して、ぼくが出發できるようにして欲しい…」

彼女は頭を激しく振って、ぼくの言いつけに従わないと意思表示した。やがて、荒々しい抗議の仕種をして、彼女は、首の肩掛けをまるで自分の背中にピタリと貼り付け、そこにしみこんでいる毒素を血液中に浸透させようとするかのように、ギュッと締め上げた。

「結果がどうなったのか、ぼくは分かった。」—— 憂鬱そうにブリッツィは云った—— 「君が去った後も、少女は死を齎す衣装を脱ごうとはしなかった…毛穴から致死性の毒素を吸収して、

だんだんと衰弱^{すいじやく}して、君のために緩やかに死んでゆく秘かな悦楽^{えつらく}を愉しみながら、昼も夜もそこに引き籠^{こも}って暮らしたのだ…」

憤慨^{ふんがい}の様子を強調しながら、ブリッツィが話し続けている間、クラヴェリは笑いこけた。

「君はこの10年間、このような後悔^{こうかい}を胸に秘めたまま暮らすことが出来たのかい?! 食べて、寝て、結婚して、裕福になって…」

「ぼくは君のことを気の毒に思う。ぼくの小さな恋愛物語^{ロマンス}の顛末^{てんまつ}は、それほど悲劇的なものではなかった。だから、この話を、不幸な主人公の男を、適当な折を見計らってどのように厄介^{やっかい}払いすればよいのか要領を得ない短編作家のために取っておくようにお勧めする…きつと新鮮味という点で、価値があるだろう。彼らは、拳銃^{リヴォルヴァー}やモルフィネ²⁹⁾や石炭やアセチレン^{ガス}とか食後酒^{フェルネ}をむやみやたらと濫用^{らんよう}し過ぎだ。」

「で、どうなった?」

「ぼくが出てゆく気配を察すると、サッと立ち上がって、《駄目!》と擦れた声を発しながら、彼女はぼくの方へ突進して来た。ぼくはその時の彼女のただならぬ表情に驚いて、後ずさりした。歯を食いしばるようにして叫び、狂ったような眼つきをして、両手を突き出して、ぼくに必死にしがみ付こうとした。まるで唯一の心の支えを失ったように感じて、二度クルクルと彼女は回転した。」

「それで、斃^{たお}れる屍体^{したい}さながらに、彼女は倒れた。」—— ダンテを引用しながら、ブリッツィは締めくくった。

「そうだ、気を失って、彼女は岩みたいにぶっ倒れた。表情は、ほんとうに死人のようだった。ぼくはその失神に付け込んだ…」

「こっそり逃げ出すために。」

「よしてくれ。サイコウラを呼び出して、単刀直入に、《さっさと、ご主人の服を脱がせてから、寝かせなさい。それから、靴下から手拭^{てぬぐい}に至るまで彼女の持ち物は全部取り上げて、それを私のところへ持ってくるように。午後、お前を待っているから。もし、お前が来なければ…気をつけるんだ》と彼女に命令するためだよ。彼女はやって来た。彼女の見ている前で、ぼくは着物を焼却^{しょうきやく}処分にした。ルーカをコセンツァ^やへ遣って、服を新調するための布地を購入し、翌日にはサイコウラ自身が仕立て屋にそれを持って行けるように計らった。小柄な魔法使いは、伊太利王家か英国王家のことにように、《この家の名誉は、あなた様の手中にあります》と空を見上げてのひら^{てのひら}掌^{かか}を高く掲げて、叱責^{しっせき}すると同時に哀願しながら、誓いを立ててお辞儀をしたが、その口調と厳かな態度から、彼女がぼくに楯突^{たてつ}くようなことはしないと確信した。その翌日、どちらかと云うと平静な気持ちで、ぼくは発^たった…」

「そうなのだ。どうしてぼくは落ち着いていなければならなかっただろうか? ぼくは迷信に左右されている自死^{タイブ}の形態をアナーイデから遠ざけておこうと、あらゆる適切な措置^{そちこう}を講じておいた。それは、その形態^{タイブ}を無くしておけば、彼女が他の形態^{タイブ}を探^{さが}すことはないかと確信していたからだ…16歳で、陰惨な決意^{てこず}に手古摺^{てこず}る者はいない。ぼくに關しては、いったい何を後悔^{こうかい}するこ

とが出来ただろうか？ 無意識の裡に、彼女の気を引いたことだろうか？ でも、ぼくは二度まで彼女の生命を救ったのではなかったのか？ 結局、貸を与えたのはぼくの方だったのだ…」

「《ここが問題だ》」—— ブリッツィは、ハムレットのように深刻ぶって反論した——「君は彼女に問い質して、彼女が失ってもよいものは何か知りたいと思ったのだろう。はっきり云って、彼女には愛のない人生なんて考えられなかった…彼女は、修理が利かないボロボロの衣類のように、そんな人生を放棄したかったのだから。君は、死刑を終身強制労働に減刑するのは、文明人のやり方だと云いたいのだろう…まあ、聞けよ。ぼくは猛烈な嘲笑を浴びて、一度として極刑を撤廃することに賛成の声を戦慄も覚えないで聞くことはできなかった。そうだ、物笑いの種にされたのだ。自由のない人生?! 果たして、そんなものに存在理由があるのだろうか？ もし、少なくとも孤独な隠遁生活がなかったならば、ぼくは信仰心の情状酌量を社会に認めることができよう…ところが、彼女が執拗に自殺すなわち解放を禁じて、不運な男——彼に責任はほとんどないのだが——を息の詰まるような窮屈な独房に閉じ込め苛立たせようと無理強いする限りは、どうして彼女のことを素直に哀れな女と考えられよう。しかも、このことは魂が地獄に墮ちるまで、狂気の鉄槌が頭蓋骨を殴打するのを感じるまで、何年も続くのだ。君には分かっているはずだが、何年か隔離されれば、痴呆症は免れないし、その間、どのような拷問に曝されるか、それは神のみぞ知ることなのだ。さあ、君はこれ以上ひどい懲罰があると思うかね。人間の肉体が精神を殺すことが？ 宣告を受けた者に選択が許されるなら、十中八、九は昔風に立ち戻ることを選ぶであろう。出来る時には、常に…彼は正気に返って、そのことを実感する。」

「屁理屈は止せよ。」

「屁理屈はどうでもよい。」

「君には分からないかい？ 死刑が廃止されたのは、何も宣告を受けた者をよろこばせるためなのではない。そうではなくて、暴力行為に適用された暴力は、正義というものを暗殺の次元に墮しめるからだ。それが、風俗を壊乱する前例となり、無意味な残虐行為となるからだ…」

「ほら、本音が出た。憐れみからではなくて、血を嫌悪するからなのだ。一瞬の暴力的懲罰よりも、我々のこの偽善的な社会は、実に洗練され礼儀正しいので、数知れない不幸な人々の喘ぎと呪詛の声が届いて、人々の繊細な神経を動揺させることがないようにと、牢獄の暗闇と沈黙に包まれた緩やかな断末魔の方を好むのだ。我々の社会は、ただ利己的で卑怯な行為にしか過ぎないものを、人間的な行為と人々に思い込ませようとしているだけだ。」

「いつも君は、大した悲劇役者だね。」

「なあ、友人、」——と、ブリッツィは、クラヴェリの胸に厳かに人差し指を突き立てるようにして——「社会一般と同じく、君は越権行為をやっているぞ。これは確かに、越権行為だとも。恩恵を蒙る人に問いたださずに、恩恵を選択する権利なんてものは、どこにもにもないからな。」

「このぼくが、その時ついうっかりして、君の意見を問いたださなかったのは、失敬だった。」——クラヴェリは、やや茶化すように云い返した。

彼らは、^{アーチ}円蓋を描く街灯の光が格別美しいヴェネツィア広場へやって来ていた。食事の時間だったので、歩行者も馬車の往来もまばらだった。ダニエーノの店先の美味しそうな陳列棚の前に、^{グルメ}食通の人々が立ち止まって、グループを作っていた。時間に遅れた数人が複雑に交差している線路を素早く横断しながら、帰路を急いでいた。広場を支配する路面電車が、^{ぼうじゃくぶじん}傍若無人に騒音を立てて^ゆ行き交っていた。姿かたちは^{かす}ブーツと^{おか}霞んでいるが、まるで陸の鯨のような勢いだった。二軒のヴェネツィア屋敷——本物と贋物——が向かい合っていて、兄弟のようにその輪郭は酷似していた。^{かげ}お蔭で、^{かも}不手際が醸し出している不調和と^{ひがい}被害の程度はやや^{かんわ}緩和されていた。

「油を売って、ぐずぐずし過ぎたのでは。」——クラヴェリは、時計を眺めながら云った——
「大丈夫、まだ15分は君と一緒にできる。」

「15分だね？ 結構だ。ファラーリア亭に着いた。入ってみよう。」

「君の^{おうしん}往診は？」——クラヴェリは^{たず}訊ねた。

「ああ、あれね！ もう約束の時間は過ぎちゃった。」

「君が、気にもとめていない様子だから…」

「うんざりだ。^{やまい}気の病なのさ。自分の^{ケース}症状を研究して、日々な医学書を読んで暮らしているのだ。自分の学問をひけらかそうと、^{おうしん}ぼくの往診を待っているのだ。毎晩、ぼくは保証してもよいが、彼は自分の手で治療が申し分なくできるよ。自分自身のことを、よりよく《知る》者は他にないのだから。彼は、^{しあわ}倖せな気持ちになって就寝する。」

「で、今晚のように、もし君がやって来ないと分かれば？」

「気分を害して寝るだけだ。それまでの話だ。」

開店したばかりの新しい喫茶店の^{テーブル}小卓に座っている人は、まばらだった。^{カエデ}楓の^{ショーケース}陳列棚や^{ホルノグラフィック}鏡や^{卑猥}な絵画が、新しい建物の一階を埋め尽くしていた。

ふたりの友人は、時間と仕事の^{こうりつ}効率を考え、古い^{サマー・タイム}夏時間を採用して、正午に昼食を、夜遅く夕飯を済ませる習慣だった。席に着くと、彼らはファラーリア亭の^{シャンペン}三鞭酒を^{グラス}酒盃に一杯と^{ビール}ピルゼン麦酒をジョッキで一杯持ってくるように云いつけた。

^{シャンペン}三鞭酒は、^{のど}ブリッツィのためだった。喉が渴いていた彼は、^{こはく}琥珀色の^{ドリンク}飲料を^すチビチビと^あ興味を^{たず}露わにして^{たず}訊ねた。

「そういう次第なのか？ それから再会の機会はなかったのかい？」

「アナーイデとの？ 3年前、一度ね。それも^{フィブローマ}繊維腫³⁰⁾の手術のために、当地へやって来た小作農を介してだった。^{ポリクリニック}総合病院で、^{しつとう}ぼく自身が^{しつとう}執刀したよ。」

「それで？」

「それで、こうぼくに話してくれた。チェンツァ夫人は、男の子を出産して数ヶ月も^た経たない^{うち}裡に、縁起でもない情熱の^{とりこ}虜になって、15歳も年下の若い農場管理人と再婚したという。彼女は、彼と一緒に^{しゅっぱん}米国へ^{ままこ}出奔した。下着類と財産は出来る限り持ち去り、その代わり^{ままこ}継子には^{ままこ}赤ん坊を残していった。」

「そこで、アナーイデは？」

「彼女の所有地を…せしめようとした数多の求婚者に大いに苛立ったアナーイデは、《剃髪すると》在家の尼僧になって、息子のように可愛がっている弟の世話に喜び勇んで専念したのだった…また、村の小僧たちに読み書きを教えようと無料の小さな家塾を運営した。すべては、こんな次第だ。」

ブリッツィは、思いを巡らすように黙っていた。おそらく彼は、想像力豊かで情熱的な性格だったので、予想していた別の結末を惜しんでいたのだろう。

「だって、」—— クラーヴェリは話を締めくくった —— 「もう一度くり返すが、本来の意味で、ぼくは恋をしていなかったし、その後も恋はしそうになかった。3日間の経過を辿って、何の痕跡も留めず消え去ってしまう病気…おっと、失礼！…この恋というものを、新しい科学を標榜するお方は、どのような範疇に分類しようとするのか、気にはなるが。」

「明らかに」—— ブリッツィは多少戸惑った様子で、反芻しながら云った —— 「特異な症状、それも極めて稀な症状にぶつかって、病気は普通の経過を辿らなかつたのだ。というのは、一般的に云って、細胞のなかで微生物が結晶化するのを叩こうと、《幻滅》と俗に謂う試薬が処方されることがなければ、まったく別の経過を辿るからだ…で、君の場合、ぼくには分かるが、かかる試薬が処方されなかつた。ただ…を除けば。」

「ただし、」—— クラーヴェリは補足して云った —— 「乳様突起炎の診断は反発という…幻滅の数に入れたくないだけだが。これこそは、ぼくの浪漫的な白昼夢のお城に吹く平凡な一陣の風だった。君が云いたかったのは、このことだろう？」

「それだ。」

「聞いてくれ。君の革新的な意見を尊重して、ぼくの謎解きの秘訣のおおよそを君に話してみたい。女性に対する情熱も含めて、そうしたことに免疫が出来ているのは、おそらくぼくの学問への情熱のせいだと、ぼくは以前君には云わなかつた。ぼくの場合は、その実験になるだろう。そこで、アナーイデの病気は、見かけは手の着けようがないが、こうした負けを知らない情熱に対しては、情熱一般を誇張し刺激する障碍と同様の効果があったとぼくは考えた。…愛されている女性の閉ざされた軽蔑が、普通は愛する者に向けようとしがちな衝動そのものを利用して、このぼくが未知の好敵手である病気を見極めて、それを見事に成敗してみせたい衝動に駆られていたとは、いったい誰が知ろう。なぜまたぼくともあろう人間が、自分の技でそれを抑えこんでしまうまで、自分が不能だとの脅迫観念や熱にとりつかれるはめになったのか。偶然が好運な発見に導いてくれた時点に至って、ようやくぼくは熱から醒めて、本来の自分を取り戻すことが出来たのだった…」

「これが、3日の間、」—— クラーヴェリは結論を出した —— 「ぼくが学問への神聖な愛と女性への世俗的な愛とを取り違えることができた理由だ。」

「こうしたことのすべては、ぼくの理論を排除しない」—— ブリッツィは負けたくないので云い張った —— 「君の恋とやらは、ぼくに謂わせれば、例の正体も原因も不明の熱病と同じ性質のものだ。俗に《神経症》と呼ばれているが。何が原因で起こるのか不明で、どうしてそうなるの

かも不明の急激な発熱だ。いうなれば、我々医学界の知られざる流星群だ…」

「一過性発熱か？」—— クラーヴェリは苦笑した。

「その通り。一過性発熱だ。」

「君がどうしても恋というものを病気の部類に入れておきたい以上、その思いつきは悪くない。」

そこで、カルロは立ち上がって、飲んだ飲料の代金を払った（支払うのはいつも彼の方だった）。

「じゃあな。」—— 彼は友人に二本の指をそっと差し出して、付け加えて云った—— 「もう、行かなくっちゃあ。」

「いつもの時間に落ち合うことにするかい？」

「ああ、いつもの時間に」

それから辻馬車を呼び寄せると、外科医は飛び乗って、ポルタ・カヴァレツジェーリへ行くように命じた。

ブリッツィは帽子を斜に被り、長持ちするトスカーナ葉巻を口に銜えると、彼が去ってゆく姿を舗道に立って眺めていた。彼は、聞いたばかりの話や、踏みにじられた広い心の持ち主のことを考えていた…彼のことを別に羨んでなどいなかった。

「何て馬鹿な奴だ！」—— 彼は、ヴィットリオ・エマヌエーレ大通りを駿馬が曳く辻馬車で遠くへと運ばれて行く友人の姿を眼で追いながら、ひとり呟いた—— 「せっかくの人生だ、同じような恋の犠牲になってもよかったのでは?!

彼自身は、そうした方が都合がよかった。彼が偶然逢った残酷で空虚なお人形の代わりに、もしアナーイデのような女性に出遭ってれば、彼は恋愛微生物の理論など喜んでお払い箱にしていたことだろう…そして、愛されるがままになっていたことだろうと。

註と参考文献

本稿のために使用したテキストは、Clelia Romano Pellicano, *Novelle calabresi* (Soc. Tip. Editrice Nazionale, Torino 1908) で、今回は医療モノ短編小説《一過性発熱》後半部（260頁から291頁まで）を試みに邦訳・紹介してみた。

まず本短編作品が献呈されている〈獅身女面獣〉について、ひとこと触れておきたい。生前〈獅身女面獣〉の筆名で知られていたエウジェーニア・コドロスキ・アルジェーリ Eugenia Codronchi Argeli (1865-1934) は、ボローニャ貴族ジョヴァンニ・コドロスキ・アルジェーリ伯爵の娘で、社交界に出てカルドゥッチやパスコリの面識を得て、《自然と芸術》、《女性》、《新文壇》などの雑誌や《民衆新聞》、《伊太利日報》、《ジェノヴァ日報》といった新聞にも多くの長短編小説を発表して活躍したベル・エポックのイタリア閨秀作家のひとりである。そのような著名な女性作家にペリカーノが本短編を献呈していることから、両者間の緊密な交友関係を推察することができる。

なお、本稿で本邦初訳として邦訳紹介した『カラーブリア物語集』中の一編《一過性発熱》に

は、シェークスピア作品からの引用が所々見られるが、そのことはドイツ浪漫主義者によって再評価された英国グローヴ座長兼劇作家シェークスピアに対する作者クレーリア・ロマーノ・ペッリカーノの並々ならぬ傾倒を証左してくれる。そうした『ハムレット Hamlet』作中の Laertes や『テンペスト Tempest』に登場する魔女 Sycorax や『オセロー』への言及は、二人の医師の対話形式によって構成されている本短編がイタリア文学の大きな伝統でもある対話体文学の本流に倣すと同時に、ヨーロッパ浪漫主義文学の影響下に構想されていることを示唆する。かかる出典に注目すれば、本小品は短編作品ながらも医科学的知識は申すまでもなく詩聖ダンテの『神曲』からの引用など、英語と仏語に堪能だった作者のヨーロッパ的教養を如実に物語って、ベル・エポックのイタリア閨秀作家ペッリカーノの面目躍如たるものがある。

- 18) 乳様突起炎 mastoiditis は、多くは中耳炎に続発し、乳突部痛、耳鳴り、難聴、鼓膜穿孔などの症状を呈す。急性と慢性とに分類される。
- 19) 分利 crisis とは、多くの場合発汗を伴う数時間以内の急激な下熱のことを指す。
- 20) ウィリアム R. ワイルド卿 (Sir William R. Wilde 1815-1876) は、アイルランド出身の眼科および耳鼻科の医師で、ワイルド三角 (光錐) に名を残す。
- 21) 蜂巢織 (疎性結合組織) areolar tissue とは、膠原繊維、蛋白多糖類間質物質、結合組織細胞からなる不規則に配列された結合組織のことで、脂肪層が大部分を占める。その代表例は皮下組織 subcutaneous tissue であるが、粘膜や漿膜下にも発達し、腺内の間にも間質結合組織として分布する。性別および栄養状態による差異が著しい。
- 22) 乳様突起開術 mastoidectomy とは、乳様突起炎を起こした側頭骨乳突洞を広く開放して、その病巣を除去し排膿をはかる外科手術療法を指す。耳後法では、耳たぶの後ろを切開し、耳内法では主として外耳道後壁から耳たぶの前側を切開して、乳様突起骨面を露出させ、メースウェン (Sir William Macewen 1848-1924) 三角を鑿あるいはバーで削り取って乳突洞を開放する。
- 23) リューマチ rheumatism とは、一般的に関節および筋骨格系に見られる原因不明の疼痛を伴う疾患のこと。急性と慢性とに分類され、連鎖球菌説やアレルギー体質説などがある。特効薬にサリチル剤があり、温熱療法も有効。
- 24) キニーネは、アンデス山脈東麓に自生する常緑樹キナの樹皮から、フランスの薬剤師ピエール・ペルティエとジョゼ・カヴァントゥが 1820 年に初めて単離に成功した最小致死量 700mg、1 回極量 500mg のアルカロイド。彼らは、この快挙に続いて、馬銭子からはプルチンとストリキニーネを、イヌサフラン種子からはコルヒチンを、コーヒー豆からはカフェインを単離して、フランス・アカデミーから 1 万フランの賞金を贈与された。
- 25) 亜鉛は、安定した Zn^{2+} (2 価の陽イオン) として健康体に 28.5mg/kg の割合で存在する微量金属元素。血液中に 50%、残り半分は骨、皮膚、膀胱、眼、男性生殖器、精子中に見られる。100 種類以上の亜鉛酵素や亜鉛蛋白質が、1940 年に発見され、生体内の加水分解反応に関与し、免疫作用、男性生殖機能、アルコール代謝、創傷修復作用、生体膜安定化作用など重要な機能を持つ必須元素なので、ヒトでは 1 日当たり約 15mg の摂取を必要とする。
- 26) フランツ・ケーニッヒ (Franz Koenig 1832-1910) はドイツの外科医
- 27) 硫酸塩は、植物に硫黄を供給する水溶性物質。鉱泉中に硫酸イオン (SO_4^{2-}) が 1kg 中 1.000mg 以上含有される場合、その硫酸塩泉は苦味泉と呼ばれる。
- 28) Cah! Turnaste quatràru? I quatràri dàno esami!
- 29) モルフィネ morphine は、眠りと夢の神 Morpheus にちなんで命名された阿片精製薬で、鎮痛、鎮静、抗不安目的に処方されるが、耐性と身体的・精神的依存症を誘発する。分子構造はアドレナリンに類似する部分があるので、19 世紀に無水酢酸をエステル化反応させて簡単に誘導

体へロインや塩酸処理による吐剤アポモルフィンが作られている。100年前は、阿片チンキが家庭常備薬として不眠症改善や鎮痛に使用されていた。ロンドン Brompton Chest Hospital が末期癌患者用鎮痛薬として開発した塩酸モルヒネ 15mg および塩酸コカイン 10mg を含む〈ブロンプトン・カクテル〉は、肝臓での初回通過代謝効果のために、注射薬の3~4倍の量を必要とし、さらに4時間しか薬効が持続しない欠点があったが、現在では、徐々に効果が発揮されるマトリックス構造の錠剤 MS コンチンや直腸から吸収される座薬が開発されて、12時間の鎮痛効果が得られるようになった。

- 30) 繊維腫 ^{フィブローマ} fibroma とは、繊維芽細胞と膠原繊維とからなる非上皮性良性腫瘍のことで、体表また ^{ファイブ} は粘膜表面に、しばしばポリープ状で発生する。一般に繊維成分の粗密によって、硬性繊維腫 ^{フィブローマ} fibroma durum と軟性繊維腫 ^{フィブローマ} fibroma molle に分類される。

以上の註記作成に使用した参考文献は、堀田満その他編集『世界有用植物事典 **Useful Plants of the World**』（平凡社 1989）；『南山堂医学大事典 **Nanzanndo's Medical Dictionary**』（南山堂 1985）；『ステッドマン医学大辞典 **Stedman's English-Japanese Medical Dictionary**』（Medical View 1981）；稲垣勲ほか編『生薬学』（南江堂 1966）である。

